

ブラジルにおけるスポーツの政治学（特集 南米初の五輪を開催するブラジル -- 五輪開催と国の発展）

著者	鈴木 茂
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	250
ページ	4-7
発行年	2016-07
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00002907



ブラジルにおけるスポーツの政治学

鈴木 茂

●はじめに

ブラジルの近代スポーツの歴史を振り返ると、政治とは切っても切り離せない関係にあることがわかる。米国の人類学者J・リーヴァーは、民衆を熱狂させるサッカーを途上国における国民統合の有効な手段と捉えたが、イギリスのスポーツ史研究者T・メイソンは、南米諸国におけるサッカー普及の政治的な意味を読み解き、独裁政権下での国民動員や体制の正当化といった別の側面を指摘している。また、ブラジルの文化人類学者ロベルト・ダマタは、サッカーをブラジル社会の特質を見透せる窓にたとえ、政治文化との対応関係を論じている。

本稿ではブラジルにおける「スポーツの政治学」、すなわちサッカーや五輪競技がはらむ政治性について考えてみたい。

●ブラジルの近代スポーツと組織化

イギリスを中心とする西欧で誕生した近代スポーツは、統一したルールを定めることによって身体の「野蛮性」を排除し、肉体の鍛錬と規律を重んじる精神の陶冶を通して近代社会の形成手段となった。それらは貿易や伝道といった活動とともに非西欧世界にも伝わり、「文明化」への手本として、まずはエリート層に普及した。ブラジルも例外ではない。一九世紀末から二〇世紀初めにかけて、貿易や鉄道経営などのために駐在したイギリス人によってサッカーが、米国起源のYMCAによってバスケットボールやバレーボールが伝えられ、ボート競技とともにリオデジャネイロやサンパウロなどの上流階級に愛好されたことが知られている。

ところで、ブラジル初の全国的なスポーツの統括組織は、一九一六年に創設されたブラジルスポーツ連盟(CBD)であるが、その創設には当時の外務大臣ラウロ・ミューラーが深く関わっていた。なぜ、スポーツ団体の組織化に、政治家・外交官が関与したのだろうか。ブラジルのスポーツ史家C・E・サルメントによれば、ブラジルスポート連盟(CBD)創設には次のような経緯があった。一九一六年七月、アルゼンチンで独立一〇〇周年を記念して第一回南米サッカー選手権が開催されることになり、ブラジルは代表チームを編成して派遣する必要がある。しかし、当時、サンパウロでは二つのサッカー協会(一九〇一年創立のサンパウロサッカーリーグLPFと一九一三年にそれから分裂したサンパウロス

ポーツ協会APEA)が対立しており、リオデジャネイロのサッカー協会(一九〇五年創立の首都サッカーリーグLMF。一九〇八年に首都スポーツリーグLMEAに改称)は、サンパウロのサッカー界の分裂に乗じて、全国的な覇権を握ろうとしていた。

一方、ベルリン五輪(一九一六年開催予定であったが、第一次世界大戦のために中止)への参加を目指し、一九一四年、首都スポーツリーグ(LMEA)は、サッカー以外のスポーツを糾合して、ブラジル五輪協会(COB)と、国内のスポーツ競技を統括し種々の大会を主催するブラジルスポート連盟(FBE)の創設に取りかかった。こうしたリオデジャネイロでの動きに対し、一九一五年、サンパウロサッカーリーグ(LPFA)は、アルゼンチン、ウルグアイのサッカー協会との親密な関係を利用し、サッカーだけに特化したブラジル・サッカー連盟(FBF)を創設して、国際サッカー連盟(FIFA、一九〇四年結成)へ加盟申請した。これに慌てた首都スポーツリーグ(LMEA)関係者はブラジル・スポーツ連盟(FBE)の発足を急ぎ、国際サッカー連盟



パカエンブー・スタジアム（筆者撮影、2013年9月）

（FIFA）にブラジル・サッカー連盟（CBF）の加盟申請を却下するよう求め、事態は完全に行き詰った。そこでミューラー外相が仲介役を買って出て、妥協の産物として一九一六年六月二日に出来たのが、ブラジルスポーツ連盟（CBD）であった。いまやサッカーの国際大会は、重要な外交の場として意識されていたのである。

●ヴァルガス時代のスポーツと国家

一九四〇年四月二七日の土曜の午後、サンパウロでパカエンブー・スタジアムの開場式が挙行された。

翌四月二八日付の新聞各紙は、こぞってその盛大さを伝えている。たとえば、『エスタード・デ・サンパウロ』紙はその前後に行われた歓迎夕食会などの催しを含めて二ページを割き、四枚の写真を掲載している。

このスタジアムは市立であるが、ヴァルガス大統領が臨席し、サンパウロ、リオデジャネイロ、ミナスジェライス三州の執政官（連邦政府の任命した執政官が州知事の職務を行っていた）、サンパウロ市や連邦区（首都）およびサンパウロ市内約二七〇市の市長が貴賓席を埋めていた。式は、約一万人の学生の入場行進から始まり、アルゼンチン、ペルー、ウルグアイの代表団、サンパウロ州の主要スポーツクラブが続いた。国歌斉唱、国旗掲揚の後、リオからサンパウロまでリレーで運ばれてきた国旗と聖火が到着し、貴賓席の正面に聖火が灯された。サンパウロ市長の挨拶を受けて、ヴァルガス大統領の開会宣言となったが、ヴァルガスは「即興で」次のように演説した。

…サンパウロ州の州都の中心部にある青年の市民文化に捧げられ

たこのモニュメントは、すべてのブラジル人の正当な誇りの源泉であり、これを建設した市政は称賛に値します。セメントと鉄の塊の簡素かつ美しいラインは、建築としてだけでなく、それ以上の価値があります。すなわち、新政府の政策遂行能力と創造力の証であります。さらに、この記念碑的なスポーツのフィールドは、その身体文化と市民教育という目的ゆえに、健全な愛国主義の精華であります。先ほど一万人のアスリートの行進を目にしましたが、その展開には国家を象徴する色彩と一体となった精確さおよび規律が表われていました。この強靱で活気のある青年、それは人種の優生学的指標ですが、私が信頼し、ブラジル人であることの誇りを感じる青年の行進を前にして、諸君にこう告げたい。サンパウロの人びとよ！パカエンブー・スタジアムは諸君の偉作であり、諸君の努力と連帯の賜物である。このモニュメントは、ブラジルのために働くサンパウロの偉大さの記念碑である。ここに、パカエンブーの開場を宣言します（O Estado de S. Paulo, 28 abril 1940, p. 8^{（傍線は引用者）}）。

ヴァルガスは、一九三〇年一月にクーデターで政権を握ると、労働政策を転換し、労働者を重要な支持基盤として体制内に組み込んだ。一九三七年一月には、予定されていた大統領選挙を中止し、個人崇拜的な独裁体制「新国家」を樹立した。そうしたなかで、ラジオ放送を含め、労働者を中心とする国民に直接訴えかける政治手法を磨いた。サッカー・スタジアムに労働者を動員し、メーデーを祝うこともそのひとつであった。

パカエンブー・スタジアムは、一九五〇年にマラカナン・スタジアムが完成するまでリオデジャネイロ最大であったサン・ジャヌアリオ・スタジアムと並び、ヴァルガスによってメーデーの祝賀会場としてしばしば使われた。

前記の挨拶のなかで、ヴァルガスはサッカー・スタジアムを「愛国主義」の揺り籠と捉え、サッカー・スポーツを通じたブラジル国民の「優生学的改良」を示唆している。言い換えれば、サッカーによる国威発揚と「優秀な」国民の育成を目指していた。この点に関し、国民統合を目的としたヴァルガスのもうひとつの政治手法である、メディアを通じた宣伝との関

連も注目される。ブラジルのスポーツ史研究者V・A・デ・メロによれば、ヴァルガスのメディア戦略で中核的な役割を果たしたロリヴァル・フォンテスは、一九三四年に創設された連邦政府の「宣伝文化普及部」(D P D C)の部長に就任して間もなく、ブラジル・スポーツ連盟(C B D)から第二回ワールドカップ(イタリア)のブラジル代表の団長就任を要請され、熱烈に信奉していたムッソリーニのイタリアに渡った。

一九三八年に開催された第三回ワールドカップ(フランス)を迎えるころになると、「宣伝文化普及部」(D P D C)はフォンテスの意向で「国家宣伝部」(D N P)に改組され、外国でのブラジルの宣伝にもいっそう力を注ぐようになった。ヴァルガスはブラジル代表に娘のアルジーラを同行させるとともに、代表の派遣費用を大盤振る舞いした。結果は、準決勝で「疑惑の」ペナルティー・キックによってイタリアに負けて三位に終わったものの、黒人選手レオニダス・ダ・シルヴァが大会得点王に輝いた。

●ある五輪選手との「出会い」

黒人選手といえば、人種をめぐる問題も広い意味でブラジルの「スポーツと政治」を語るときに欠かせないテーマである。個人的な体験で恐縮だが、私には一人の女性アスリートとの「出会い」が強烈に記憶に残っている。

二〇一二年の早春のことであった。一九六四年の東京五輪に出場した陸上選手に関するドキュメンタリーを制作するため、ブラジルからその元選手と撮影スタッフが近く来日することになっているが、選手村で通訳を務めた日本人の消息を調べて欲しいという依頼を受けた。たった一人で東京にやってきたその元選手は大変な恩義を感じており、約半世紀ぶりの対面を実現したいとのことであった。思い当たる限りいろいろ手を尽くしてはみたものの、結局、分らずじまいに終わり、そのまま撮影隊も帰国した。

アイダ・ドス・サントス、それが元選手の名前であった。リオデジャネイロ州ニテロイ出身の黒人女性で、東京五輪にはブラジル選手団唯一の女性選手として参加した。走高跳びで四位入賞を果た

し、この記録は個人競技としてブラジル女子五輪選手の最高成績であり続けている。

長くブラジルの黒人史を勉強してきたものの、この依頼を受けるまで、恥ずかしながら私はアイダ・ドス・サントスという選手の存在を知らなかった。五輪で活躍したブラジルの黒人陸上選手としては、ヘルシンキ大会(一九五二年)とメルボルン大会(一九五六年)において三段跳びで連覇を果たしたアデマール・フェレイラ・ダ・シルヴァ(マルセル・カミュの映画『黒いオルフェ』で「死の男」を演じている)、モントリオール大会(一九七六年)とモスクワ大会(一九八〇年)で同じく三段跳びの銅メダルに輝いた「ジャンプのジョアン」ことジョアン・オリヴェイラ、アテネ大会(二〇〇四年)の男子マラソンの銅メダリスト、ヴァンデルレイ・デ・リマがいる。三人は五輪以外の様々な国際大会でも好成績を残しており、国民的英雄となった男子選手である。

東京から帰国すると大歓迎を受けたとのことであるが、件の二〇一二年に制作されたドキュメンタリー『アイダ・ドス・サン

トス、不屈の女性』（アンドレ・ブポ監督）には、今はなき国立競技場を再訪し、郷愁とともに「とても悲しかった、とても辛かった。ブラジルから、いえブラジル五輪委員会の役員たちから私はずいぶんいじめられた」と回想する姿が映し出されている。

ファヴェーラで生まれ育ち、友達が通っていたスポーツクラブで陸上競技を始め、「金にならない」と反対する父親の目を盗んで試合に出たという。苦学しながら大学で教育学を修めている。予選会では本命視されていた白人選手に勝って出場権を獲得したものの、ブラジル五輪委員会は派遣を渋り、選手団とは別に来日して選手村に入らざるをえなかった。開会式には自前の白シャツの上に男子用のブレザーを羽織って臨んだ。コーチはおろか、試合用のユニフォームやシューズすら用意されておらず、通訳の日本人青年が奔走した末、スポーツ用品メーカーから提供されたものを使ったという。ただしシューズは短距離用のもので、予選では着地で足首を捻挫した。手当てしてくれたのはキューバ選手団の医師であったという。

黒人であること、女性であるこ

と、ファヴェーラ出身であること。アイダー・ドス・サントスは過酷な条件のなかで黙々と練習を重ねた。メキシコ大会では近代五種で出場したものの、次のミュンヘン大会（一九七二年）では派遣取り消しの憂き目にあっている。夏季五輪のリオ開催が決まると、テレビや新聞で取り上げられるようになったが、「忘れられたヒロイン」の扱いが多いようだ。

●おわりに

ブラジルにおける「スポーツの政治学」には、いくつもの面がある。サッカーに典型的に現れているような、国民統合や体制への国民の動員の国際社会での国家の偉信を高める手段としてのスポーツという面はそのひとつである。多民族・多民族社会における人種的・民族的マイノリティの差別克服と社会経済的上昇の機会という面もある。いずれの面からも、ブラジル社会の歴史の一端を垣間みることができる。五輪やサッカーのワールドカップは、そのまたとない好機である。

（すずき しげる／東京外国語大学教授）

《参考文献》

- ① ロベルト・ダ・マータ「社会の〈内なる〉スポーツ——国民劇・国民祭としてのフットボール——」山口昌男編『見世物の人類学』三省堂、一九八三年。
- ② 「東京五輪の恩人 写真で再会。ブラジル人選手、四九年前の通訳と」『朝日新聞』東京版、二〇一三年一〇月五日付け夕刊、一二面。
- ③ 「東京五輪の恩人 会いたい」『朝日新聞』東京版、二〇一三年九月二七日付け夕刊、一五面。
- ④ Janet Lever, *Soccer Madness: Brazil's Passion for the World's Most Popular Sport*, Prospect Hights, Ill: Waveland Press, 1995. J・リーヴァー『サッカー狂の社会学』亀山佳明・西山けい子訳、世界思想社、一九九六年。
- ⑤ Roberto daMatta et al. eds., *Universo do futebol: esporte e sociedade brasileira*, Rio de Janeiro: Pinakoheke, 1882.
- ⑥ Mario Filho, *O negro no futebol brasileiro*, Rio de Janeiro: Mauad, 2003.
- ⑦ André Ribeiro, *O Diamante eterno: Biografia de Leônidas da Silva*, Rio de Janeiro: Gryphus, 1999.
- ⑧ Eduardo Sarmiento, *A regra do jogo: Uma história institucional da CBF*, Rio de Janeiro: CEPDPC-FGV, 2006.
- ⑨ Victor Andrade de Melo, "Esporte e propaganda política: Um estudo comparado dos governos de Vargas (1930-1945) e Perón (1946-1955)," *Materiales para la Historia del Deporte*, Vol. VII, 2009, 43-58.
- ⑩ *O Estado de S. Paulo*, 28 de agosto de 1949. (<http://acervo.estadocom.br/pagina/#/19400428-21669-nac-0007-999-7-not>)（最終確認 二〇一六年五月五日）
- ⑪ "Aida dos Santos: Uma Mulher da Garra." (André Pupo/Digimidia Recursos Digitais, 2012) (<http://tv.r7.com/record-play/esporte-fantastico/memoria-do-esporte-brasileiro/videos/aida-dos-santos-uma-mulher-de-garra-relembra-a-trajectoria-vitoriosa-da-atleta-17102015>（最終確認 二〇一六年五月五日）